



はじめは、出版社への1通の手紙。差出人は、強盗殺人(被害者2名)、死体遺棄等で公判中の陸田真志氏。拘留所で、池田晶子氏の著作『さよならソクラテス』に出会えたおかげで、原典の『ソクラテスの弁明』を読み、自分の中にも「善」があること、「ただ生きるのではなく、善く生きる」ことに気づき真に自らの罪を自らに認めさせ、被害者に謝罪できたことについてお礼を綴った手紙です。

本書は、その後、7か月あまりにわたって、池田氏と陸田氏との間で交わされた計23通の手紙による「哲学対話」を収録しています。

この対話が始まって2か月後に、陸田氏の第一審の判決が言い渡されます。陸田氏は、このまま「善く生きる」ことで死んでいけるとして、判決が死刑であっても控訴しないと云います。実際、言い渡された判決は死刑。

そこで、池田氏が陸田氏に控訴をせまった「池田晶子三通目の手紙」は圧巻です。かたくなに控訴を拒んでいた陸田氏も、「本当に、善く生きる気があるのであれば、控訴しなさい」という池田氏の説得に圧倒されたのでしょう。陸田氏は、弁護人による

『死と生きる 獄中哲学対話』



池田晶子・陸田真志 著
新潮社
1,620円(税込)

控訴を取り下げることの思いとどまり、二人の対話は継続します。

その後の往復書簡で、池田氏に導かれながら、生と死、被害者の死、死刑、愛などについて語られた陸田氏の思索の過程は、強盗殺人犯によるものという先入観を見事に裏切ります。

しかし、その過程は決して平坦ではありません。陸田氏の語りは、文章が公になることへの自意識によって屈折したり、池田氏を批判する作家からの手紙によって、自己中心的で攻撃的な地の性格が現れたりします。

それに対し池田氏は、齒に衣着せず厳しく叱責すると同時に、「一字一句が絶筆です」

と言って死ぬ気で書くよう陸田氏を激励します。

本書と同様に強盗殺人犯の死刑囚との往復書簡をまとめた秀作として、加賀乙彦氏著『死刑囚との対話』があります。本書とともに人の中に在る「善」を引き出した作品といえますが、『死刑囚との対話』が静かに心に訴えかけてくるのに対し、本書は、読者をダイナミックに哲学的な思索へと引きずり込んでいきます。

さて、陸田氏の本書における最後の手紙は、池田氏の促しにより、被害者や遺族を思いつつ殺人について語ったものです。殺人犯が殺人を哲学的に分析した論考として、非常に興味深い手紙です。

本書は、この陸田氏の殺人論を池田氏が論評し、さらに理性に従い語っていくよう求める手紙で終わっています。この後も、陸田氏が、池田氏に叱咤激励されながら、善く生きるために思索を深めていくことを予感させます。

残念ながら、池田氏は、2007年、陸田氏よりも先にこの世を去りました。翌2008年、陸田氏は、死刑を執行される際、「池田晶子さんのところに行けるのはこの上もない幸せです」という言葉を遺して逝ったといえます。 